日本赤十字看護学会誌　J. Jpn. Red Cross Soc. Nurs. Sci Vol.5, No.1, pp.90-97, 2005

実 践 報 告

障害児者の家族交流会のセルフヘルプ機能に関する検討
－交流会の分析から－

北川　かほる[1]，岡崎　美智子[2]

Function of Self-Help in Group Work with Families of Handicapped Children and Persons
— An Analysis of One Group's Work —

KITAGAWA Kahoru，OKAZAKI Michiko

キイワード：セルフヘルプ、障害児者の家族、グループワーク
Key Words：Self-Help, Families of Handicapped Children and Persons, Group Work

Abstract

The present study investigated the ability of a support group to facilitate improvement in self-help skills for families with handicapped children and persons, and the roles of nurses in supporting families to improve their self-help skills. Subjects were ten mothers of handicapped children who attended a support group meeting chaired by the author. Opinions and views expressed during the meeting were recorded and analyzed from the self-help perspective.

Findings were classified by continuous comparative analysis and the following four concepts were extracted: "Releasing experiences and emotions", "Sharing experiences and emotions", "Offering useful information" and "Operation of the group". Of these concepts, "Releasing experiences and emotions", "Sharing experiences and emotions", and "Offering useful information" matched three of the five self-help group functions that the author extracted from the literature: "Meeting individuals with similar experiences", "Releasing and sharing emotions" and "Acquiring useful information".

The support group allowed the participants to meet with others in similar situations, to release and share experiences and emotions, and to obtain useful information, thereby fulfilling three self-help group functions. Furthermore, the results suggest that the roles of nurses were to act as facilitators, build relationships with the parents of handicapped children, and assist in the operation of the support group so that participants could help each other to improve their self-help skills.

[1] 鳥取大学医学部保健学科　[2] 島根大学医学部看護学科

受付日：2004年10月15日
採用日：2004年12月15日

要旨

本研究の目的は、障害児者の家族交流会のセルフヘルプ機能、および交流会参加者のセルフヘルプを支援する看護職の役割について検討することである。対象は、交流会に参加した障害児者の母親10名および司会進行役の筆者を加えた計11名である。交流会中の発言内容を記録し、障害児の子育て関連発言をセルフヘルプの視点から持続比較分析による分類、抽象化を行った。その結果、４つの概念＜経験・感情の開放＞、＜経験・感情の共有＞、＜役立つ情報の提供＞、＜会の運営＞が抽出された。この概念中、＜経験・感情の開放＞、＜経験・感情の共有＞、＜役立つ情報の提供＞は、筆者が文献から見出したセルフヘルプ・グループの機能５点中の３点、《共通の体験をした人との出会い》、《感情の開放と共有》、《役立つ情報の取得》と一致した。つまり、一致したことは、共通の体験をした人と出会い、経験･感情の開放と経験･感情の共有ができ、役立つ情報の提供により、役立つ情報が取得できたことである。このことから、本交流会は３点のセルフヘルプ機能を有していることが明らかとなった。また、看護職の役割は、ファシリテーターを意図し、障害児者の親達とパートナーシップを築き、参加者が相互にセルフヘルプを発揮できるように会の運営を援助することが示唆された。

Ⅰ．はじめに

在宅障害児を養育する家族への社会的支援については、その必要性が理解されてきている。そして、障害児の主な養育者は母親が大半であり（峠田，1997，pp.779-787）、障害児を養育する母親の多くは、QOLの低下傾向がみられる（北川，2000，pp.47-50；峠田，1997）。したがって、障害児者の看護においては、母親や養育を支えている家族への看護援助も重要である（広瀬，2002，pp.308-314；森山，2001，pp.287-295）。障害児の母親の支援としては、同じ障害児をもつ母親同士、または障害児の家族の会などを通しての情報提供や相談が多いことは明らかになっている（広瀬，1989，pp.11-20；北川，1997，pp.51-56；小林，2001，pp.476-477）。しかし、情報提供や相談の内容や効果に関する研究は僅かである。そこで社会的支援の一つとして、障害児者の親の有志と連携して平成15年度より障害児者の家族交流会を開始した。本研究の目的は、月１回開催している障害児者の家族交流会（以下交流会とする）のセルフヘルプ機能、および交流会参加者のセルフヘルプを支援する看護職の役割について検討することである。

Ⅱ．障害児者の家族交流会・学習会開催の経緯

筆者は、平成10・11年に鳥取県西部およびその周辺地域の在宅障害児者の母親の介護実態調査およびQOL調査を行った。その結果、幼児期の障害児の母親は、健常児の母親に比しQOLの低下傾向がみられ、精神的・社会的ストレスを考慮したサポートが重要であることが示唆された（北川，2000）。また、学校卒業後の障害者の母親は、身体的負担の増加が推測された。在宅介護に関連した情報提供は障害児の母親が大半であった（北川，1998，p.25）。障害児者の家族の会は存在したが、専門職への依存傾向がみられた。そこで、障害児・者とその家族のQOL向上への支援が必要であるが、まず、母親達がどのような療育や社会的支援が必要であるかを学習し、障害児の療育を親が決めることができるようになることが重要と考えた。そして、問題意識をもった障害児者の母親の有志と、障害児者の療育向上に関した学習会を始めた。平成15年度からは、障害児者の家族および関連職者を対象に専門的知識・技術に関する学習会、障害児者の家族のセルフヘルプ支援の場として交流会を開催している。

Ⅲ．研究方法

A．対象と期間

平成15年11月19日開催の交流会に参加した障害児者の母親10名およびファシリテーター役割を意図した司会進行役の筆者を加えた計11名である。

B．交流会のテーマ

今回のテーマは「現在の悩み」であった。

C．交流会の実際

交流会の日時、および当日の会のテーマを事前に文書で配布した。家族は、当日自由意志で参加した。会は約2時間であった。

D．データ収集

交流会の開始から終了までの対象者の発言内容をテープレコーダーに録音した。共同研究者は、会に部外者として参加し、参加観察法で対象者の表情や動作など、非言語的表現をフィールド・ノートに記録した。

E．分析方法

データ分析は、舟島（1999，pp.103-170）による看護概念創出法を参考に、帰納的にすすめた。看護概念創出法は、看護に関わる多様な現象を構成する人間の行動の総体を明らかにする研究方法である。本研究では、交流会参加者の多様な行動の総体を明らかにするため、交流会参加者の発言を分析した。

逐語記録に起こしたデータを、「この母親と筆者の障害児の子育て関連発言はセルフヘルプという視点から見るとどのような発言か」という持続比較のための問をかけ、初期コードとしてデータ化した。データ化した初期コードを基に、①．交流会参加過程の発言を人間の一般的な発言でとらえるとどのような発言であるかをコード化（障害児の子育て関連発言コード）した。②．①で得られたデータに、交流会参加過程の発言をセルフヘルプという視点から分析すると、どのような発言かを明らかにしコード化（障害児の子育て関連発言―セルフヘルプ対応コード）した。抽出したコードに、各々、再度「この母親と筆者の障害児の子育て関連発言はセルフヘルプという視点から見るとどのような発言か」という持続比較のための問いをかけながら、持続比較分析による分類、抽象化を行った。

データの分析は筆者が行い、その過程では、データ分析の客観性を得るため共同研究者が参加観察法により収集したフィールド・ノートの記録を基に、筆者が行ったデータ分析を査定し、概念創出の合致度を検討した。査定により問題が指摘された箇所は、両者で再度分析、修正を行い、データの信頼性と妥当性を高めた。

筆者、共同研究者らは、長年障害児者とその家族を支援し、親子に介入した場面の現象分析を行ってきた。この過程で、それぞれの場面の関わり技法を検討し、自己確知を高める努力をしてきた。

F．倫理的配慮

会の冒頭に交流会の趣旨と研究について説明し、交流会中の会話は参加者の同意を得てテープレコーダーに録音した。録音内容を報告書として記録し、参加した親達に発言内容の確認を行ってもらい、異議のないことを確認した。

G．用語の定義

本研究で用いたセルフヘルプとは、障害がある子どもをもつ親同士が、子育ての経験を共有し励まされ、子育ての知識・技術を学び、子育てしていく力を獲得することである。

Ⅳ．結果

A．対象者の属性

母親の年齢は30歳から50歳で、平均41歳であった。子どもの年齢は2歳から26歳で、平均13歳であった。子どもの生活状況は、入院中、家庭から障害児学級・養護学校に通学、小規模作業所に通所、グループホームで生活しているなどであった。また、障害は寝たきりで生活全般に介護や医療的ケアが必要な重症心身障害児者から、身辺生活は自立している発達障害児者まで多様であった。

交流会は、平成15年5月より月1回開催し、今回で7回目であった。対象者の母親10名の交流会参加状況は、初回が2名、2回目1名、3回目1名、4回目4名、5回目2名であった。

B．障害児者の家族交流会とセルフヘルプ

11名の対象者から収集したデータの分析から抽出されたコードは、251の障害児の子育て関連発言—セルフヘルプ対応コードであった。ここから15のカテゴリが形成でき、このカテゴリから４つのコアカテゴリを示すことができた(表１)。この４つの概念は＜経験･感情の開放＞、＜経験･感情の共有＞、＜役立つ情報の提供＞、＜会の運営＞である。

子育て関連発言—セルフヘルプ対応コードから抽出されたカテゴリ【現在の悩みの相談・質問】は中学部以下の子どもの母親からであった。＜経験・感情の共有＞、＜役立つ情報の提供＞は主に高等部在籍中または卒業後の子どもの母親からであった。司会進行役の筆者の発言は【子育ての方法・考え方に賛同】、【一般的情報】、【子育てに関する方法の提案】、【子育てに関する考え方の提案】、＜会の運営＞であった。

１．経験・感情の開放

経験・感情の開放は、障害児者をもつ親に出会い、障害がある我が子の子育てについて話すことで感情が開放されたセルフヘルプを表していた。

参加した障害児者の親が経験を振返り、感情を表出した発言は「今すごく問題になるというのは、思春期の入口の子どもが、この頃自分で『勃起する』と、訴えることがあるのですが、父親はそのことについて話したがらない。どう説明し対処すればよいか聞きたい」、「子どもは生理がどういうことか理解できないので、なった時にはどう思うのか。また、どう教えればよいか経験があれば聞きたい」、「あんまりベタベタしない子で、『お母さん』て甘えたりもしないし、昔から『親子関係がよくない』と、ドクター（筆者注；医師のこと）にも言われて」（筆者注；感情表現の乏しい子どもの話がされる中から)、「うちの子も何所に連れて行ってもOK、誰にだかれてもOK、一緒だしみたいで。今考えたら多分反応の仕方を知らない。やっぱりちょっと寂しい気がして」などであった。

２．経験・感情の共有

経験・感情の共有は、子育ての経験・悩みや子育て方法の提案などに対して賛同・共感を示し、仲間として子育ての経験を共有し、励ましたり励まされたりしたセルフヘルプを表していた。

高等部の子どもの母親から、子育てに関する考え方（筆者注；生理、精通は、子どもが成長した大事な日として、子どもに伝えられるとよい）の提案があり、参加者全員が「そうですね」と賛同した。また、参加者が経験を振返り感情が共有された発言は（筆者注；感情表現の乏しい子どもの育児を努力していたにも関わらず、医師から「親子関係に問題がある」と指摘された辛い経験に対して)「そう言われて不安になることもあると思う」、「言われると不安になるけどね」(筆者注；発言した母親は、参加者に自分の辛かった気持ちが理解してもらえたと安心した。そこで「親子関係に問題があると指摘されていたが、ある時、子どもが母親には甘える様子を見た施設の職員や学校の先生から、『お母さんは違う』と言われたが、素直に喜んでいいのか戸惑いを感じている」と話

表１．コアカテゴリ、カテゴリと延べコード数

コアカテゴリ	カテゴリ	延べコード数					
		卒業後（２名）	高等部（１名）	中学部（１名）	小学以下（６名）	全　員	司　会
経験・感情の開放	子どもの障害の紹介	2	1	1	6	0	0
	現在の悩みを話す	1	0	1	4	0	0
	現在の悩みの相談・質問	0	0	5	10	0	0
	我が子の経験を話す	9	1	4	11	0	0
経験・感情の共有	子育ての方法・考え方に賛同	16	18	2	5	3	10
	子育ての経験や悩みに共感	4	3	0	0	1	0
役立つ情報の提供	一般的情報	0	18	2	1	1	6
	我が子の経験からの情報	6	12	2	2	0	0
	他の子の経験からの情報	11	2	0	2	0	0
	子育てに関する方法の提案	12	13	0	0	0	4
	子育てに関する考え方の提案	1	7	1	0	0	4
	子育てに関連した問題の指摘	5	7	0	0	0	0
会の運営	話された問題の整理・説明	4	1	0	0	0	2
	発言を求める	0	0	0	0	0	1
	会の進行の提案・説明	1	1	0	0	0	4

した。この発言に対して）「素直に受け止めていいんだよ」（筆者注；筆者は、障害があるため表現力が乏しいこと、また、このような子どもを持つ親は、同じような辛くて不安な経験があることを、これまでの障害児の親への支援から把握していたため、専門職の視点から障害の状態と親子関係について追加して）「表現する力には個人差がある。見てると親子だってことは分かるよ」などであった。

3．役立つ情報の提供

役立つ情報の提供は、参加者は我が子の子育て、および、障害児の療育に関連した経験や学習して得た知識等を提供し合い、提供された経験や情報に触れ、効果的な子育ての知識・技術を学んだり、現在の問題の捉え直しや解決の方向性を見出すことなどができ、子育てしていく力を獲得するセルフヘルプを表していた。

参加した障害児者の親の発言は（筆者注；男の子の陰部の清潔ケアが母親では分からないので悩んでいることに関して）「息子が痒いといった時『お父さんの出番よ』と」母親の私は「オチンチンの洗い方を知らないので、お願いしてからは、主人がやってくれている」（筆者注；自閉症児の排泄の躾けについて）「普通の子は小さい頃野外放尿させても、一定の年齢になると社会のルールやマナーを学んでいくことができる。でも、自閉症などの障害児は、小さい頃に野外放尿をインプットされると大人になっても、何所でもする。小さい時からの排泄の躾けが大切。息子の排泄の躾けに取り組んだ結果、適切な場所、時にトイレで排泄ができるようになりましたよ」などであった。（筆者注；障害児の生理や精通に対して不安のみが大きいことに対して）筆者の発言は「女の子は生理があるとお祝いする。男の子も精通があればおめでたいことなのでお祝いするとよいと思う」などであった。

4．会の運営

会の運営は、参加した障害児者の親が＜経験・感情の開放＞、＜経験・感情の共有＞、＜役立つ情報の提供＞を通して、支え合い学び合える場となるように会の運営を維持し継続できるようなセルフヘルプを表していた。

自己紹介と今回のテーマである「現在の悩み」についての発言が終わった後、筆者から「いろいろな悩みが出されていますが、性や交流などの問題が出ています。誰か自分の悩みから口を切ってくれたらいいのですが」と、参加者に発言を促した。これに対して参加者から「例えば性の問題を提起してくれている。今一番困っている人が、どういう方向にとか、気持ちが少し和らぐとか、見通しがもてるというような方向があったら嬉しいかなという思いが、私はするのですが」、「性によって個々に違うので、プライバシーとか伝えてもいい範囲で伝えてもらって、そのことについて、何か経験とか、前の色んな自分の持っている情報の中でこういう方向がよかったよとかあったら返してあげたいなという気持ちです」などの発言があり、会が進行していった。また筆者は、発言のきっかけが捉えられない参加者に対して、感情表現の乏しい子どもの悩みに関連して発言できる機会を捉えて「Aさんところもね。日頃表現が乏しいけど、いよいよになったらすごく出したよね」と、発言を促すなどをおこなった。

Ⅴ．考察

A．参加者の発言とセルフヘルプ

同じ困難をもつ者同士のセルフヘルプの場として、セルフヘルプ・グループがある。セルフヘルプ・グループには様々なモデルがあり、すでにセルフヘルプ・グループの機能や特徴に関しては、多くの報告がある。三島（1998，pp.39-54）は、セルフヘルプ・グループの機能について①グループ・プロセス、②イデオロギー、③ヘルパー・セラピー原則、④体験的知識、⑤セルフヘルプ・グループの専門職援助に対する批判的役割、⑥グループ・ダイナミクス、⑦Empowerment（力の獲得）を挙げている。三原（1999，pp.46-59）は、セルフヘルプ活動の特徴を、①認知の再構成、②生活技術の学習、③情緒的サポート、④個人的な情報の提供、⑤社会化、⑥自己信頼と自尊心の獲得を挙げている。岡（1998，pp.14-20）は、セルフヘルプ・グループの本質を「なりたち」と「はたらき」に分け、「なりたち」の基本的要素として①共通の体験、②自発的参加、③継続的活動、「はたらき」の基本的要素として①わかちあい、②ひとりだち、③ときはなちを挙げている。セルフヘルプ・グループの諸機能に関して述べられていることは

多様であるが、共通した点として《共通の体験をした人との出会い》、《感情の開放と共有》、《役立つ情報の取得》、《自分自身の生き方を見出す》、《活動を通して力を得る》の５点が見出された。

今回行った交流会の分析からは、４つのコアカテゴリを示すことができ、その中の＜経験・感情の開放＞、＜経験・感情の共有＞、＜役立つ情報の提供＞は、筆者が文献から見出したセルフヘルプ・グループの機能《共通の体験をした人との出会い》、《感情の開放と共有》、《役立つ情報の取得》と一致した。このことから、今回の参加者は、前述の３点のセルフヘルプが得られたと考える。その他のセルフヘルプ・グループの機能、《自分自身の生き方を見出す》、《活動を通して力を得る》などに関しては、今後、継続的にセルフヘルプ・グループに関連した活動などに参加する中から生まれてくるものと考える。つまり、親の会活動などへの参加過程の分析を、さらに加えていくことで明らかになると考える。今回の分析は、テーマが「現在の悩み」の１回の交流会の発言であり、《自分自身の生き方を見出す》、《活動を通して力を得る》との関連を示すようなカテゴリは抽出できなかった。今後、継続的に会に参加した親達を対象とした質的研究が必要と考える。

参加者は、事前に文書による交流会の案内で開催日時とテーマを知っている。したがって、テーマに関心があり参加する者も多いが、テーマ以外の悩みや不安も持っており、テーマ以外の発言も多々ある。また、参加者の構成は、何か教えてもらえることを期待して参加する初回の者が大半を占める場合もあれば、子育ての苦労を聞いてもらえることを期待した者が多い場合もある。したがって、参加者の構成と発言内容に触発されて、話題があらぬ方向に発展し、惰性に流れてしまいやすい危険もはらんでいる。また、愚痴を語り合う会で終わってしまうことも予測できる。このような親の会の傾向を、筆者は、過去の経験から実感しているため、テーマ決めと会の運営に関わるファシリテーター役割の存在の重要性を認識していた。本研究では、ファシリテーター役を筆者がとったため、共同研究者に参加観察役を依頼し、ファシリテーター役割が果せたかを振り返る機会にもした。ファシリテーター的役割がとれていたかについての参加観察者のコメントは、①親達から出された不安や悩み、問題などの発言の中から、全員で話し合っていく内容の方向づけの提案や、②会の進行状況を見守りながら話題が焦点化されるように軌道修正をしたり、③発言する機会をうまく捉えられない親達の発言の機会をつくるなどの働きがみられたであった。

＜会の運営＞は、セルフヘルプ・グループの機能としては報告されていない。しかし、会の運営により、参加者が効果的なセルフヘルプが得られるようにするため、参加者の経験を把握して会の方向付けの提案や発言の機会がつかめない参加者の発言の場作りをすることが重要となる。多様な参加者がセルフヘルプを得られるには、ファシリテーターのその場への居方、発言のタイミングと内容は、大きな意味をもつと考える。このことは、参加観察者のコメントも同様の指摘をしていた。

Ｂ．参加者の構成とセルフヘルプ

林ら（2002，pp.9-20）は、障害児をもつ母親の親の会への３段階のかかわり方について、模索的参加から探求的参加、さらに支援的参加を示している。今回の分析では、３段階は明確ではないが、参加者の障害児の子育て関連発言とセルフヘルプ対応コードについてみると、【現在の悩みの表出・相談・質問】は、中学部以下の子どもの母親からが多かった。これに対して、【我が子の子育て経験からの情報提供】は、中学部以上の子の母親からが、【子育てに関する方法・考え方の提案】は、高等部以上の子の母親からが多かった。このことは、子育て経験の浅い親は、【現在の悩みの表出・相談・質問】を中心とした、模索的参加から探求的参加をしていたと考えられる。これに対して、子育て経験の豊かな親は、【子育てに関する方法・考え方の提案】が多く、支援的参加をしていたと考えられる。つまり、子育て経験の豊かな親は、次世代の親を支援していく応援者として社会資源になっていたと考える。

親の発言の比率から、子育て経験の浅い親の悩みや問題の投げかけに対して、経験の豊かな親は、共感し情報提供などが多くできていた。このことから、交流会の参加者が、子育て経験の豊かな親と経験の浅い親の両者の構成になると、セルフヘルプが得られやすいと考える。したがって、多様な経験段階の親が交流会に参加できるように

配慮していくことも必要と考える。また、経験が豊かで支援的立場にあっても、障害児の親の危機的な時期（Keith，1973，pp.524-527）や子どもと親へのサポート体制の変化などもある。それぞれの時期や状況により、経験が豊かな親も、新たな悩みや不安が現れてくる。したがって、ファシリテーター役割がとれる看護の専門職は、経験の豊かな親達に新たな悩みや不安が現れた場合、親達が安心して感情を表出できる会運営の力量が求められる。

足立（1999）は、親同士のソーシャルサポート形成を促す条件の一つとして、「子どもが類似した障害をもっていること」だと述べている。しかし、今回の交流会は参加者の母親とその子どもの年齢も障害も多様であったが、参加者相互の効果的なセルフヘルプを引き出せていた。子どもの少ない地方都市では、類似した障害がある子の親の会の活動が困難なこともある。したがって、子どもの障害および年齢が多様な親が参加する会も必要と考える。しかし、子どもの障害および年齢が多様な親が参加する会のセルフヘルプ機能に関する研究はみられない。今後、このように子どもの障害および年齢が多様な親の交流会が、有効なセルフヘルプが得られるような検証の積み重ねが必要と考える。

C．看護職の役割

親の発言回数と、看護職でファシリテーター役割を意図した司会進行役の筆者の発言回数を対比してみると、最も高かったのは＜会の運営＞で筆者７：親７、次いで＜体験・感情の共有＞が筆者10：親52、＜役立つ情報の提供＞が筆者14：親105であった。これより、最も多い＜会の運営＞についても親からの発言が半数有り、参加していた親の発言を中心に交流会が進められていったことが推測できる。

小川（2000，pp.252-254）は、障害児者とその家族のエンパワーメントに貢献するには、親と専門家が対等に相互の知識、経験を分かちもつ視点の必要性と、この視点が活かせる例として、セルフヘルプ・グループとの共働を挙げている。このことは、交流会における親と筆者の関係に繋がるものであると考える。筆者が交流会に参加した親達の発言を尊重し、参加者が相互にセルフヘルプを発揮できるように、ファシリテーター役割を意図し、参加した親達とのパートナーシップのもとに、交流会を運営していくことの重要性を意味していると考える。今回の交流会の分析から分かったことは、親達の発言を中心に交流会が進められ、３点のセルフヘルプが得られていたことである。これらの結果から、今回の交流会は、筆者が多様な親達の発言を尊重し、それぞれの参加状況に応じ、セルフヘルプを得ることができるように、参加者と対等な関係で会の運営を援助することができていたと考える。

また、障害児者の療育に関した悩みや不安を話し合う過程では、子どもの疾病・障害を理解し、健康・生活上の問題に応じた生活の配慮や工夫に関した専門知識が必要になる。しかし、参加している親が提供できる情報が無い場合や、間違った情報を提供することもある。このような場合、他の参加者は不安になったり、間違った情報で我が子の療育を行うことにもなる。したがって、疾病・障害の病態や治療の現状と限界、および健康・生活上の問題に応じた生活の配慮や工夫に関する専門知識・技術を持った看護専門職の参加は必要である。つまり、看護職の役割は、ファシリテーターを意図し、必要に応じて専門知識の提供をする。また、障害児者の親達とのパートナーシップのもとに参加者の多様な発言を尊重し、参加者がセルフヘルプを得ることができるように会の運営を援助することであると考える。しかし、今回の結果は、１回の交流会の分析からでしかなかった。したがって、今後交流会の回数を増やし分析を重ねて、役割を検証することが必要と考える。

Ⅵ．結論

交流会参加者の発言をセルフヘルプという視点から分析した結果、４つの概念＜経験・感情の開放＞、＜経験・感情の共有＞、＜役立つ情報の提供＞、＜会の運営＞を示すことができた。これらの概念から本会のセルフヘルプ機能が明らかとなった。また、看護職の役割はファシリテーターを意図し、障害児者の親達とパートナーシップを築き、参加者が相互にセルフヘルプを発揮できるように会の運営を援助することが示唆された。

Ⅶ. 本研究の限界と今後の課題

今回調査した交流会は、月１回開催している中の１回であった。そのため、対象者はその時に参加できる状況にあった限られた参加者であった。今後、各回の交流会の調査を積み重ね、今回示すことができたセルフヘルプ機能、および看護職の役割について検証を重ねていく必要がある。

謝辞

交流会に参加し、本研究にご協力いただいたお母様方に感謝申し上げます。

文献

足立智昭（1999）．障害児をもつ乳幼児の母親の心理的適応とその援助に関する研究．東京．風間書房．

舟島なをみ（1999）．質的研究への挑戦．東京，医学書院．

林知里・伊藤美樹子・早川和生（2002）．障害児の親の会（SHG）へのかかわり方にみた障害児の母親の心理的エンパワメント・プロセス．日健教誌，10（1），9-20.

広瀬たい子・田中克枝（2002）．脳性麻痺児の母子相互作用の検討－NCATSによる観察・測定から－．小児保健研究，61（2），308-314.

広瀬たい子・上田礼子（1989）．脳性麻痺児の受容に関する調査－母親を中心に－．日本看護科学会誌，9（1），11-20.

北川かほる・引野裕子（1997）．経管栄養移行期における重度障害児への援助－母親の心理面に関して－．鳥医短大紀要，26，51-56.

北川かほる・笠置綱清（2000）．要介護障害児をもつ母親のＱＯＬに関する検討．鳥医短大紀要，32，47-50.

北川かほる・南前恵子・前田隆子（1998）．在宅重症心身障害児・者の家族支援に関する一考察－介護実態の分析から－．日本家族看護学会第５回学術集会，25.

小林啓子・甲斐静江他（2001）．障害児の親のセルフヘルプ活動－母子保健とヘルスプロモーション－．東京都衛生局学会誌，105，476-477.

Keith, M.R,（1973）．The feelings and behaviour of parents of handicapped children. Developmental Medicine and Child Neurology，15，524-527.

三原博光（1999）．セルフヘルプ活動とエンパワメント．小田兼三・杉本敏夫・久保則夫編，エンパワメント実践の理論と技法．中央法規．45-59.

三島一郎（1998）．セルフヘルプ・グループの機能と役割．久保紘章・石川到覚編，セルフヘルプ・グループの理論と展開．中央法規．39-54.

森山美知子（2001）．障害児をもつ家族への援助．森山美知子編，ファミリーナーシングプラクティス　家族看護の理論と実際．医学書院．287-295.

峠田和史・村松大治・橋本佳美・北原照代・西山勝夫（1997）．養護学校通学児童の在宅介護の実態と介護者の健康状態．日本公衛誌，44（10），779-787.

小川喜道（2000）．障害児者のエンパワーメント．脳と発達，32（3），60-62.

岡知史（1998）．セルフヘルプグループとは何か．大阪セルフヘルプ支援センター編，セルフヘルプグループ．朝日新聞厚生文化事業団．14-20.